

草木育種

上

農務省 農商務省
 農務省 農商務省
 共 冊 號 冊

太政官文庫			
		一	和
		二	
		三	書
四		四	
		三	門
		二	
		一	
冊架函號			

236

內閣文庫			
		一	和
		二	
		三	
六		四	
函架冊號類			

內閣文庫	
番號	和 11143
冊數	4 (1)
函號	183 236

耕種

183-236



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM Kodak



文 化 戊 寅 新 鑄

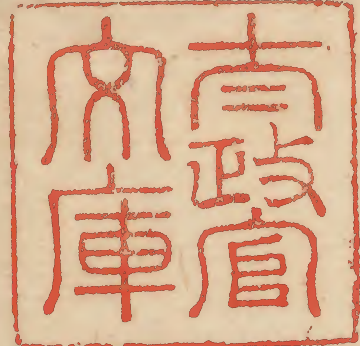
灌園岩崎先生著

草木育種

全二冊

江戸書肆

千鍾房
玉山堂 合刻



あはれ部あいのを
きりかへしけしめあはれ
あはれ部あいのを
きりかへしけしめあはれ
あはれ部あいのを
きりかへしけしめあはれ
あはれ部あいのを
きりかへしけしめあはれ
あはれ部あいのを
きりかへしけしめあはれ

明治十二年購求

あはれ部あいのを
きりかへしけしめあはれ
あはれ部あいのを
きりかへしけしめあはれ
あはれ部あいのを
きりかへしけしめあはれ
あはれ部あいのを
きりかへしけしめあはれ
あはれ部あいのを
きりかへしけしめあはれ

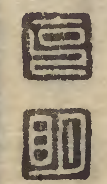
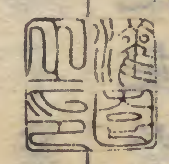
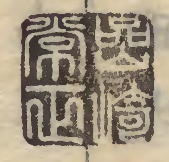
草木育種序

此系原鍾山聖之耳或費財可苑諸矣非
培圃貴矣若至于一子餘種而草木表瓦
然之性殊隨其性必無不無殖友友友為
紫飛若隨風經山河可復然生作紫紫風
仙益其實觸之破氣而若生浮萍隨其暖
可浮池片花突出而庭波芽芽世眼而左
纏于竹籬寄生扶于木液而保生如藤日
雲霧可娘生莫孤子世根寄他章可生特

史之無手可貼籬壁是皆造化自然之理
何惟人功乎友草木之氣而生也至其死
也至人豈得而主之然人為萬物之靈故
長難其長能生難其生換回造化在掌握
友能宜其燥濕避其寒暑使冬之順其性
強其字交域而似易地人力亦可以奪其
功順其理而隨其性苟不失一氣性皆本
若之學種藝之法不求而得之培藝生者

世不如此言今我耳豈之不我觀致莫
奇也種偃可足國字以菜也名為草木育
種唯也種菽日用之一物云爾

文化丁丑至日也子又玄堂宏崎等正
漢南吳文昭書



草木育種目録

卷之上

序 凡例

草木の徳を志る凡

草木に陰陽ある事

土地の善悪并水之事

草木に吉日凶日并宜を忌との事

下種の事

澆灌并培養之事

接法 并圖

草木育種目録

三

捲附り 壓條の事 并 圖

移樹 并 伐木の事

登盆の事 附り 養花挿瓶の法

除虫法 并 虫の圖

暑寒風雨霜雪の節分得の事

塘窖冷土垂の事 并 圖

種樹運送の事

卷之下

穀菜果藥品花木類百八十五品入の法

草木育種凡例

一 草木入の事ハ。上卷小十四ヶ條を分て。種樹の要用と著す。その阿部ふを以てハ不同あり。假令ハ南國ハア。北國ハア。又東西ノヨリノ色葉味あり。况本邦と漢と時節お遠あり。シテ。茲小入を以て。如の阿部ハ東都ふを以て。魚崎凡述を國々ノヨリで考べ。

一 凡穀類菜乾の内日用の物と。果類。及。果乾。藥品。草木。乾。又。花。葉。等。ハ。賞。と。さ。り。の。文。字。ハ。供。ふ。し。の。又。入。し。川。ノ。子。ノ。極。法。ハ。有。る。ハ。

一 和名と漢名を以て。漢名ハ。又。漢。名。ノ。通。稱。と。さ。り。の。あり。

玄武の代とてかくのこたりに四神お應の地とて居ぬれぬ官位
 福祿とてありて無病長壽ありとて之に○秦始皇の書とて燒儒
 とて之に付と種樹の書とてのありとと勅下とてたりと○佛の
 此の書とて神のあまらたりとてひきりて樹と樹とたたりと
 ありとて人屋むらいとてありとて
 以上作庭記群書類從中收者 ○史記貨
 殖傳言植木之利云安邑千樹棗燕秦千樹栗蜀漢江陵千樹橘
 淮北千樹菽注梓木也陳夏千畝漆齊魯千畝桑麻渭川千畝竹又云
 千畝苞茜千畦薑韭此其人皆與千戶侯等○大和本草云吾邦
 植テ為民用有益物多シ木ニ則白桐梧桐梓桃杏栗棗橘柑
 金橘茶楮漆桑朴椿山茶楮櫛櫚柳檉枒數種山椒桤梨榛杉

檜椈羅漢松等也草類則麻苧藍紅花薯蕷油菜紫草茜芋也又
 竹類可植者多シ○按之ふ其外猶多樺シラカバアカカバニ種アリかたは多く
 植べ北國に多し木堅く材とあり又皮を剥くと楮の皮と製を
 ぞし又此皮生ふと能燃兩舟小消さる也鷹鷄とてきふりの是死火
 把とて用ゆ然る軍用小とて益あり

草木に陰陽あり事

種樹書曰麥屬陽故宜乾原稻屬陰故宜水澤とて之も種は向陽
 に屬ふけ陰溼に根をくだ陰陽とも小俱ゆへ百穀の長たり
 世俗惣て向陽の地とて好瓜陽性也陰溼とて好ハ陰性の草と
 する理と考ふるに似て碑云人參ハ陰地ふけざるハ陰性の草

その如きと。全陽性なり。有る寒冷小傷と。向陽気忌殊
天の陽氣不勝さる。故に人參ハ陽虚を補。又地黄ハ陽地
と好とも陽氣小あさむ。今陰性ハ旱小傷と。寒冷
陰湿の地不傷のなり。故に陰虚を補。凡草木ハ陰陽の性
ある事如のごとく

土地の善悪并水地事

周禮考工記曰。橘踰淮而北為枳。○南方草木狀曰。嶺嶠已南無
蕪菁種之則變為芥。○孔志約曰。動植形生因方外性。春秋節氣
感氣殊功。離其本土則質同而効異。乘干米摘乃物是而時非。名
實既爽。寒温多謬。用之凡庶其欺已甚。施之君父逆莫大焉。
本草序例

○土之生物。其成數在五。故草木皆五出。桃李花有六出者。必雙
仁。皆能殺人。瑯琊○按。草木ハ地の毛髮と。人ハ血氣盛
と。凡ハ毛髮更々光澤あり。血氣衰と。凡ハ毛髮脱落。或ハ白く
光澤あり。草木ハ地の毛髮と。地氣肥と。草木ハ好々常々かろて花
さる実の。諸國の名産あり。其物を去地ハ不應と。且地氣盛
処に生るゆへ食物ハ味よく。藥種ハ効力他。凡小産さると遠ハ氣
味細く。奇功ある。又按。草木ハ地の毛髮と。凡ハ地氣の品と
考ると肝要あり。草木ハ好々赤つちハ好抄あり。其ハ
よきものあり。破ふと凡ハのあり。草木各好むハあり。深山幽谷ハ
生る草木ハ陽性なり。清寒なり。有る多ハ陰地と好。葉緑ハ忌地

蘭蕪沃の類は用てよへ生長は

○昔西の言云地錦扱云亀井戸辺の業年陽田川の陽地

土より昔西の言云小石すうたる砂まらなるよし

一又云云云の砂の中より砂をきり用てよへ生長は

たる砂まらなるよし昔西の言云水仙柑類菊あぶら

てり○按に真玉中石竹あゆりむゆり松梨の類一又扱

扱色より肥てあゆり生れり但一符之の土はうたまりて乾

画くごあ草瓜扱より

○八王子の砂地錦扱云黒辺中まあり難自各玉子大

才似の扱あり但一向めなる以上を赤め用てよへ生長は

うの用也○按に右の外又山川より海苔を細く扱て用てよへ

河より揚る砂の用也一と云云扱けありて扱るものあり

○田土細瓜扱て用てよへ水草を扱て肥一又細瓜を入り又

自無小沼池まらて圍なる下陸地にて泥ふまらるる度なるあり

小石まらりてかき取り或は乾き入り用てよへ生長は

ふひちかきりして扱れよ林檎あお薦あり又梨桃扱ての乾

色より又まんあめと牽牛子あで一こよ。扱てよへ生長は

合を扱て甚よし。夏を乾かして洗ふる人糞等用てよへ生長は

あめのがちまの雪の水をたよへて用てよへ生長は

○けと土根を扱て土中より扱て痛の根敷を瓜経ては土と

下秧吉日宜成日收日苗代の日小用より。世俗皆卯の日を忌む

辛未 癸酉 壬午 癸未 甲午 甲辰 乙巳 丙午
丁未 戊申 己酉 乙卯 辛酉 己亥 乙未

挿秧吉日田人の日によ。苗代小庭たる日より。四千九日あるを忌む

甲子 乙丑 丁卯 己巳 癸酉 乙亥 丙子 己卯
庚辰 癸未 甲申 乙酉 乙丑 辛卯 癸巳 乙未
戊戌 庚子 辛丑 壬寅 癸卯 丙午 戊申 己酉
癸丑 戊午 己未 庚申 辛酉 癸亥

不收成日丙辰 壬辰 辛亥謂之天地不成 乙未謂之天地不成 凡播種俱合忌之

種作忌九焦日御所謂也九焦日ハ拾芥抄の九坎日と同なり

正辰 二丑 三戌 四未 五卯 六子 七酉 八午
九寅 十亥 十一申 十二巳

壠田吉日田と耕小用火日為吉謂丙寅丁卯甲戌乙亥之類

壠田忌土鬼有九日 癸己 甲午 乙酉 辛丑

壬寅 己酉 庚戌 丁己 戊午
穀米入倉吉日 庚午 甲戌 乙亥 丙子 己卯 辛巳

壬子 癸未 己酉 戊子 己丑 庚寅 乙未 壬寅
癸卯 甲辰 己酉 丙辰 癸亥

田事避忌實錄 田祖即神農氏甲寅日死 甲主乙己死 辛

亥莖 田父丁亥死丁未莖 田母丙戌死丁亥莖 田夫丁亥死辛亥莖 已上並忌開田耕作耕耘 后稷癸死專忌播種

種菜吉日 庚寅 辛卯 壬戌 戊寅

種麥吉日 庚午 辛卯 辛巳 庚戌 庚子 辛卯

種瓜吉日 甲子 己丑 庚子 壬寅 乙卯 辛巳

種麻豆吉日 甲子 乙丑 壬申 丙子 戊寅 壬午

壬寅 芝麻忌西南風 不忌則悉變為草

種樹書曰凡樹木當元日日未出時以斧斑駁推折棗李等樹謂之嫁樹又曰凡果實初熟用雙手摘則年々生果見麝香薰則花不結子又曰果實異常者根下必有毒蛇切不可食又曰花果樹

如曾經孝子及孕婦手折則數年不著花或不甚結子又曰果子先被人盜咬一枚飛禽便來咬凡果木未全熟時摘若熟了即抽過筋脉來歲必不盛又曰凡種好花木其傍須種葱薤之類庶麝香觸也又曰種花葉處栽數株蒜遇麝香則不損又曰鑿果樹納少鍾乳粉則子多且美又樹老以鍾乳末和泥於根上搗去皮抹之復茂又曰凡種樹宜在望前在望後少實○花鏡曰七月勸地最能殺草○按に播種接樹櫻物て諸の草木は種ふ九焦日見南風火日曆小天大地火と忌といふ○地錦抄云草木之種は毎月曆小節に日まぐべくと忌とある日なり耕種はくせりまきとて大よきるふ事なり接木さくふと忌なり也つぎ供さ入刻り除の

を條よハクくみすとしどもも。一日も用たるべし

下種さまた事事

按あに土の子木の母あり。これ動物の胎と書と同ド。母の氣血調和されば子も自安し。又然るに土地の陰陽と考ふ木の陰陽亦さるりの一なり。種ハ万年青ともんの実ハ日久きうの根の辛又あり。又日陰又も五穀菜蔬ハ陽ノ属ともあり。中も稻の種ハ葉の上ありて陽氣ハ得て實の。又陽地ノ種又木の數を多くまくとすと○種ハ子を貯るには書あり。書實のめはあり。秋実のりのあり。竹とよく實入る母。先一を書て肉と割て中の種を下。肉ハ皮に滿仁ハ殼に充て硬ければ。こも實のりを貯る。あらび一本

の草多れハ一子ハ種と試一歩ハ葉をまく一種ハ子を試下。たらなき草も初めの種を種とす。種ハ葉を貯るには書あり。書實のめはあり。秋実のりのあり。竹とよく實入る母。先一を書て肉と割て中の種を下。肉ハ皮に滿仁ハ殼に充て硬ければ。こも實のりを貯る。あらび一本

○代代事事 瓜の數を多くまくとす。瓜ハ先を貯るには書あり。書實のめはあり。秋実のりのあり。竹とよく實入る母。先一を書て肉と割て中の種を下。肉ハ皮に滿仁ハ殼に充て硬ければ。こも實のりを貯る。あらび一本

類其種。と云り。今俗に実之と云。肉と云に極多のあり。生る處
遙く又腐易くと云。肉と去くると云。

澆灌并培養の事

按るに山野自然小生る草木ハ実熟して自然腐爛するは
則その物乃肥と云る。草木ハ葉落く早に以て腐實本ハ秋葉落て
ち瓜覆ひ等と云。是自然の理あり。ある瓜実を採る或ハ瓜落
除ちてするハ理に逆もの之故に。入培養法は用ざるハ生長せ
ざる。花鏡云。人力亦以奪天功と戒小生る。又曰。澆灌人之需
飲食也。不可太饑亦不可太飽。と云り。凡草木不用肥廿一品
あり。後小審と云。又人糞馬糞なるの糞物と極めたり。種樹

書曰。花木有不宜糞穢者甚多。尤宜問用之。非其宜立稿と云り
蘭百兩金杜鵑虎茨枇杷杜衡など小糞瓜用しを忌む也。又神
社の庭或ハ神前ハ生る草木等はよく糞糞は物瓜用難し
あり。かくの如き樹ハ代小用る肥あり。干糞灰汁油糟酒粕等瓜
合せ腐しと用ハ大抵同根小肥と云り。左傳曰。蘋蘩蕒藻之菜可
薦於鬼神。と云。水菜瓜と云。又もの類ハ糞汚小解する
故。澆灌して神小供と云。と云。

○肥土 又臘土 農圃 冬といふ時 拵る法ハ年々耕作する山畑の
ちへ至の後人糞とそぎ。寒にいてさせく乾し。又糞瓜とそぎとく

乾し。三交。後小あてぬかりに貯。春分の日に中ふさし。と云

切かえきそを付よく虫蟻の類。又草の根芥の類と指拵くす。是を
まて益ハひれ腐て地。蚯蚓の類と生くと害成るす。
農圃四書
菫菊肥土の

法也。これと諸の草木葉もど瓜栲とを交あせせて用へ

○三和土 地錦抄小合肥と名くき法ハ野去三斗赤土一斗。去

土一斗。右三をよくまぜ小をう瓜ふまひ。人糞一斗。煉合せ五十日

不どねうくつうまう。用。何葉の灰又と糠灰炒て切ませうもよ

○又日南小並木いけ垣煉屏のたぐひう山ると。陰ハ水陰とて

必冷氣の地まう。一二尺を三四尺も温氣のゆるものへげお合肥

多入くは。魚洗けをまひ肥とまて。葉の性びまらつきまうもの。

合肥ハ後程後と肥の理まう。又日草花ハ惣くま中まう。二月中旬

まど紀と用へ。葉出と用ハ却と傷。葉用及ハ合肥と思へ。かけ紀
ハ必きまうまうと。い。按るん生て後。け紀と用を。おまよ。せ。種。後
肥不足不見ゆれば。おふよりて。け肥と用てよ。○花鏡云。八月草
類。豆肥。木類。忌肥。

○溝池の泥并水 種樹書云。香草など。よく糞と用ひて。是

おあみ。いけの泥。或ハ米泔水など。瓜。まてよ。い。まう。又溝

のち。瓜。揚。まじ。乾て。よ。う。ひ。石。竹。牽。牛。子。の。糞。よ。り。又。ま。が。く。ち。瓜

ま。う。ら。小。合。て。揉。さ。う。け。り。

○厩肥 まやげお。い。と。も。い。代。の。肉。へ。入。る。肥。ま。う。農。民。お。や。く

あ。ね。瓜。用。の。ま。法。ハ。中。人。糞。ふ。灰。と。ま。ぜ。合。せ。腐。し。種。瓜。う。り。付

草中と根より之をとり又牡丹の根より冬の内多く取てし。
る糞ハ多ク用ひるを貯へて一〇馬尿ハ花壇細目云人尿より
和ちり諸草小女づく申

○獸内の類 涅槃經曰如橘得鼠其果子多と云り鼠と人

糞け小漬云くうて浮る付柑類の根埋付ハ実多し又猪肉

竹ふよろしきもの物類相感志ふく之なり其外諸の獸より腐爛

時根より之を埋くよし古た皮の類もよし

○牛糞 掘と植つ付牛屎は玄狐ませ埋て喜ふなり種くそ

○羊屎 立夏の赤羊屎と泥小合せ連とる付ハ花多し。

花鏡云報春先用羊鹿屎和水澆又暑月澆冷茶

○猪糞猪尿 種樹書曰木樺當用猪糞又冬青樹凋瘁以猪

屎壅之則茂一説猪溺灌之又曰凡種花欲得花多須用肥土秋

冬間壅根春來着花自然盛以猪尿和土令發熱為肥土

○鶏糞 種樹書曰鶏屎壅茉莉則盛壅百合則甚滋生と

い今も畑草畑心草龍鬚等の肥に用也又菊梅等の肥に

まぐれねん花のそとよく出さるゆありむ然のそ屎皆よし

○介類 蛤蜊文蛤を外諸介類桶へお入漬を腐る付

殻とる揚そみ瓜用也松不用くよし

○塵埃 燕子花石菖萍蓬草烏芋慈姑等の水をお入てよし

○茶滓 暑氣ふらむる茶の根とてよし南で園穀ふまじ

草木部 雜類 卷之三

○草綿子 草綿子 桑の根根入入又緒木の根根入入又油油と榨榨す

粕粕も用用ててす

○梳頭垢賦 梳頭垢賦 ちんらん又又多多木木乾乾けけ根根入入又又多多す

接法接法は事事并并圖圖

燕居筆記曰接法有六曰身接曰根接曰皮接曰枝接曰壓接曰搭接○農圃四書曰桑二月而接也○有插接有劈接有壓接有搭接有換接○葉世傑草木子曰植物去皮枯氣在外也動物敗內死神在中也大和本草 ○張約齊種花法注云春分和氣盡接不得夏至陽氣盛種不得立春正月中旬宜接櫻桃木榉徘徊黃薔薇正月下旬宜接桃梅杏李半支紅臘梅梨棗栗柺楊柳紫薔薇二月

上旬可接紫笑綿橙橘已上種接莖於十二月間沃以糞壤兩至春時花果自然結實立秋後可接林檎川海棠黃海棠寒珠轉身紅視家棠梨葉海棠南海棠以上接法並要時將頭與木身皮對皮骨對骨用麻皮緊緊纏上用箬葉寬覆之如萌出相長即撒去箬葉無有不盛也○柑橘橙等於根棘上接者易活○接樹須取向南隔下者接之則着子多○梅樹接桃則脆桃樹接杏則大○凡接花木雖已接活內有脂力未全包生接頭處切要愛護如梅雨浸其皮必不活以上種樹書 ○接小農政全書小接板又審審本邦小接板小接板とあり其本其本よりくく何何のよのよく何何接接べし何何と九焦九焦南風天火地火の日日忌忌す先先其の接砧の本本三四歳より六七

草木部 雜類 卷之三

歳まぐの木の勢より。又四五葉とひとよせたる木の葉十葉の
木少ても勢ふたひ又接ぎ。大樹へ接ぎたる枝の勢より木根の
の枝の皆截さく。そのおぼる枝へ接ぎあり。是をさつと云ふ。又砧樹の
接ぎ接ぎのむき根切さむむぎよ。又切らむむぎの接ぎのむ
去年のむき根を年接ぎあり。むき根のむき根より。肥なるむき切
さく接ぎあり。又弱木の接ぎる木の根の中ふさぐ。葉もさかむ。又
むき根をさく入るむき根。風をさく。又接ぎむき根。葉の切口と種
の切口
蠟或は膏を塗とす。

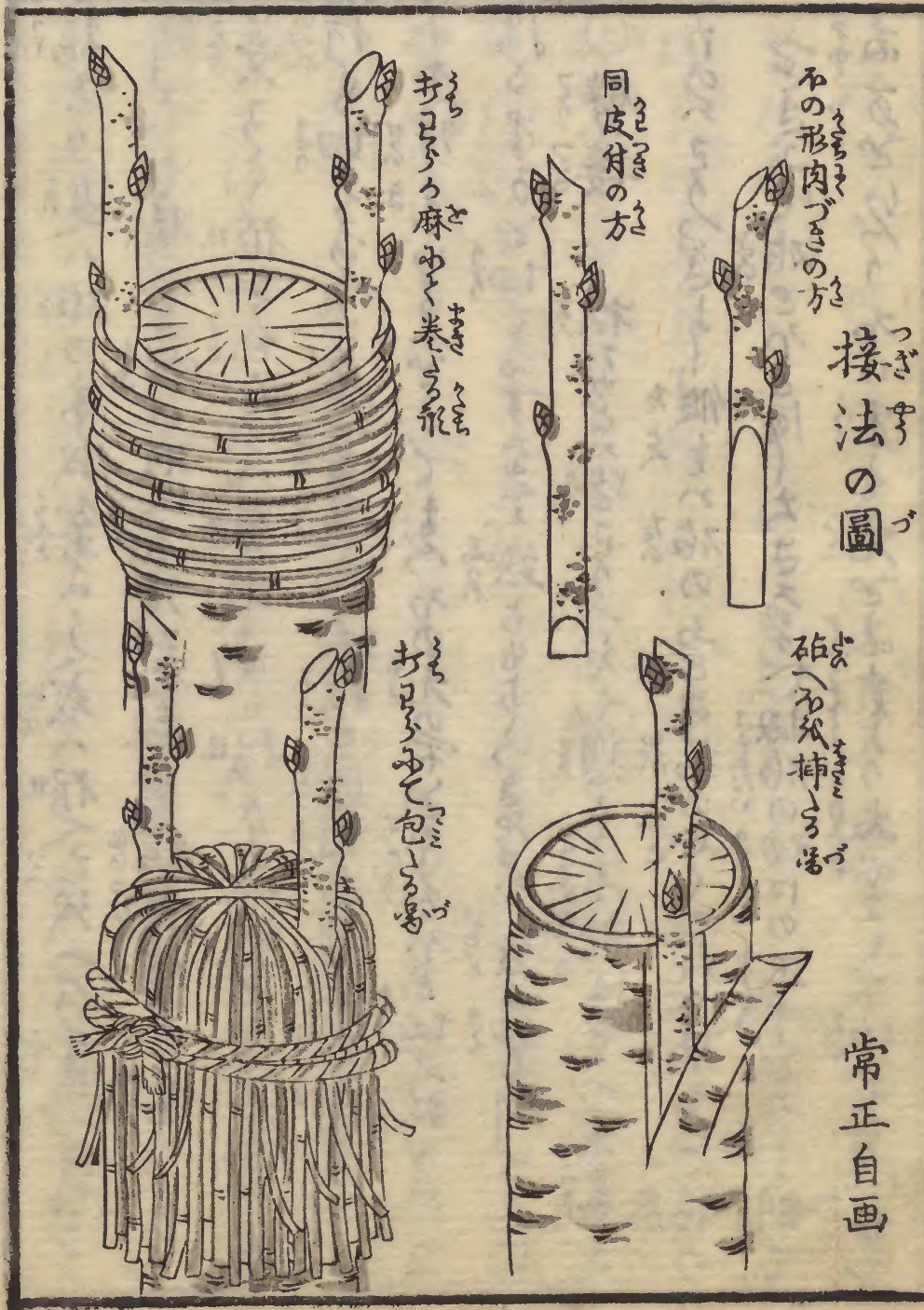
○換接 又根接と云則だつと云。仕接の先を大木の
切口より。或はあふらひむき根樹と云。むき根の接ぎむき根の切口より

人形と四五所接ぎるむき根と接ぎ。但木口は水けりむき根のむき根
より。その木の木口はあより。木の心と皮とをむき根のむき根と接ぎ
けり。接ぎむき根。むき根のむき根あり。木口より皮の厚さむき根のあり。
むき根のあり。又大木の厚く。小木の薄く。若葉の皮と厚くけり。又
木のむき根小刀から付いつむき根の接ぎむき根。けり。むき根と接ぎ。
接ぎむき根。二三のむき根。二寸接ぎさく。片この皮を心よりむき根
接ぎむき根。足會むき根。砧のむき根二寸むき根。二寸一分むき根。けり。
なり。外の方の皮より。むき根と接ぎ。そのけりむき根のむき根をむき根
砧へむき根むき根。むき根の切口あり。むき根のむき根一分むき根と接ぎ。
むき根より砧の切口へ肉あがるなり。砧太けり。二寸三分と接ぎ。接ぎ

草木育種卷上

廿三

接法の圖



木の形肉づきの方

同皮付の方

ちりやちり包む方

石（や）火挿す方

ちりやちり包む方

常正自画

高接を漏斗に仕うけりる圖

根を石や土に接する形

身接の圖



草木育種卷上

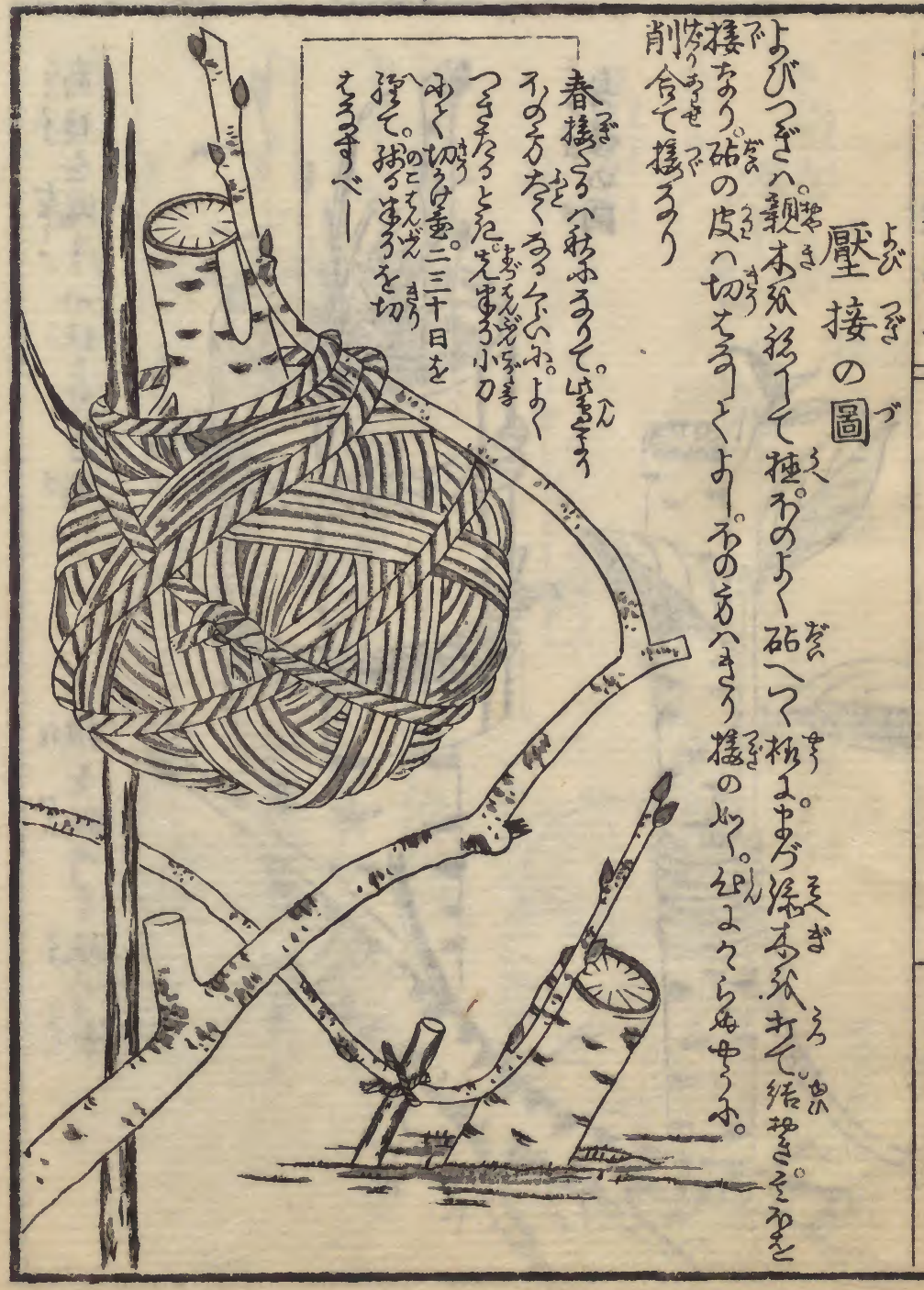
廿六

草木の種

壓接の圖

よびつぎへ親木を糸で縛り、そのよく砧へつけ、木を湯に漬けて、結をゆるぎ、接あり、砧の皮へ切るとよ。その方へさす、接の如く。紐よりからぬやうに削合せて接する。

春接するへ秋ふりて、はらす、その方々をうへへ、よ、つぎとた、えまう、小の、切ら、二、三十日を、強て、接するを切、ま、す、べー



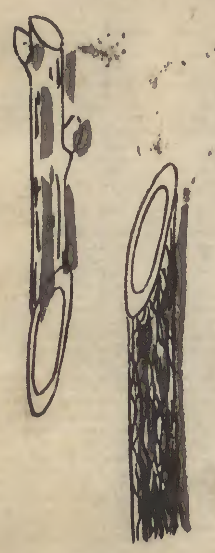
劈接の圖



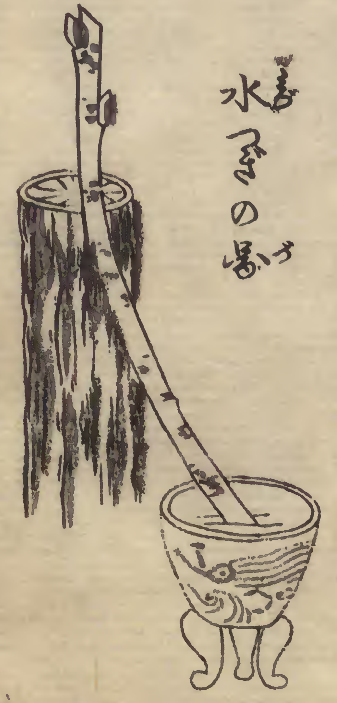
挿接の圖



搭接の圖



水接の圖



草木の種

○搭接

砧も不毛同ふまきしめく。砧とすすよをだ。又おも
すすふまき。合く巻まき之割竹瓦壁よそく。そよと志りとまきこ
うどかぬ中しめく。接めまきとて砧うけしめく。牡丹と接まき法こ
○挿接 是くまき。接べたり砧長く切れ挿とまき。接ま
ちくまき。その所の先砧よび接の如しとて接あり

○水つぎとまきあり。是くを接木の元砧入く。挿花の如して

其先と接あり。そのしめたる水ハ。二日ぐといよ入替てよ。右

さし接水つぎまき。そのしめたる水ハ。二日ぐといよ入替てよ。右

接木とまき。接まき。そのしめたる水ハ。二日ぐといよ入替てよ。右

○根と砧とて接法あり。是く砧小す木と掘。その根の勢

よく皮のまねぬるあり。切まきとて砧の如しとて接

あり。大木一本とて砧本數十本と掘べし。物とて根

接木とまき。接まき。そのしめたる水ハ。二日ぐといよ入替てよ。右

接木とまき。接まき。そのしめたる水ハ。二日ぐといよ入替てよ。右

接木とまき。接まき。そのしめたる水ハ。二日ぐといよ入替てよ。右

接木とまき。接まき。そのしめたる水ハ。二日ぐといよ入替てよ。右

根と砧とて接べし

捲 附リ 壓條の事

種樹書云。凡種花木。須冬至後立春前斫直接。有鶴膝如大母指
者長二尺許。札干芋魁中。掘令寬調泥漿。細切生忌一束。攪於泥

二ツよ割玉扱ととあよせむとあふ枝の皮よぬ疵をつけ。そきぶ
 の更右の竹尻合と縄ぬくを赤木の芽あるうと入肥土をぬ
 ませ合せ。さうぬ根よ竹の内へ入ぬけぬ乾ぬやうよ昔とつ
 或ハ小草と挿す。器にお尻をぐべ。根の生いさるに考て竹
 とらう。初疵を付るわう下の両尻もぐも切うけぬ。又竹を合せ
 糸のどくよきで巻。よく根のよく生いさる毎砂まかと切をほして
 お腹のなうかえうは。又あふ枝とさうあふ。砂の完より枝と
 通海の内なう肥を尻もせ入て。右のどく切ぬもより。又小科
 ぐく或ハ木の根のとあある枝とさうあふ桶とさうぬて尻入るより。
 又あよよりて根とさうあふあり。その木の芽の出あまう。根のよ
 ぬ

壓條の圖



諸木
 疵をつけ埋或ハ竹とさうあふ葉もそを包下
 掛けバ疵のあう。根を生ずるより

あり。若年久く居はるる大樹ハ根粗く類少ゆへに。二三年
 采伐節よれた時根を片と掘切早。枝を切結ふ二年めふ。又片を切早。
 まづその木根を細根とせしめて後植替てよし。是を轉採の法としりし。
 大木の枝を多く切ると。方角の向に遠ねやうん。植法あれども。
 植ふよきと向の遠るもあり。一葉あると云がごと。本根植ふ小を。
 初より二三寸も漬く。植ふはゆきより。初より深く植ふは必傷。
 めある。植法はまが。根の形より大きき掘。柔さち根下敷共。
 之樹をま根の早より細さち根。さうくとよりかけ。細さ本の
 枝やうよつと。又ち根の。あつて根の下までちの行こつては
 ちり小つと。水とそぐ。又右のや細さち根。根足入はち。

あまつとさる。水とま流さ角ハち根より根足引入るあり。是を
 水と云。しん色も植ふ。あふ。そのの丈夫なる木。植る樹より竹根
 液。純ふてまると結ふ。む結ふ竹根とつと。竹ハ随分掘ふ
 こと。筋遠ね根よ直よ結ふとよし。竹ハ二本づつ。一はひある
 極よ流さる。植て二三年の内。其れと土乾たる角。あをを灌へ。

伐木事

禮記月令。孟春之月禁止伐木。鄭玄注云。為盛徳所在也。 ○周官曰。仲冬斬陽木。
 仲秋斬陰木。○齊民要術曰。伐木四月七月。則不蟲而堅服。○花
 鏡云。十二月伐竹木不蛀。○按。木と切あは。其あふ。そ。林擲。樹
 李の類。心二月に。芽の出ぬ。若よし。小枝ハ小斧。或ハ鎌の類。あふ。

又鉢植と地とを長く居つて向へ水抜の穴あり。蚯蚓升りて
池の内不すむと必濕くつひに根腐るあり。又蕪鉄松の乾へ棚下のセ
久しき。を蚯蚓と云はるは、又蕪鉄松の乾へ棚下のセ
虫と云ふ。蛾の食あり。早くちん取すべし。

養花挿瓶法

秘傳花鏡云。凡花滋雨露以生。雖瓶養亦當用天落水。每日漆換
其開度久若三四日不換。花必零落。蓋必乾枯。每夜宜擇無風有
露處置之。猶可多延一二日之鮮麗。此乃天與人參之力也。折花
之法。不可亂攀。須擇其木之叢雜處。取初放有致之枝。或一二種
比枝配色不冗不孤。稍有畫意者。方剪而燻其折處。挿之。則滋不

下洩。花可耐久。蓋有不宜清水養者。又不可不察焉。如梅花水仙。
宜鹽水養。而梅更宜醃猪肉汁。去油俟冷挿花。且瓶不結凍。雖細
蓋皆開。若貯古瓶中。常刺以湯。能結子生葉。海棠花須束薄荷
葉於折處。再以薄荷水浸養。細蓋盡開。梔子花折處須搥碎以鹽
入瓶中。乾挿自能放花抽葉。花謝後鹽仍可用。牡丹初折即燃其
皮。不用水養。常以蜜浸自榮。謝後蜜仍可用。芍藥燒枝後即挿水
瓶中。夜間另浸大水缸內。早復歸瓶。則葉綠花鮮。蓮花先用泥塞
其折孔內。再以髮纏之。先挿入瓶。後方灌水。夜置無風有露處。則
菡萏皆開。芙蓉竹枝。金鳳花。皆當以沸湯養之。葉熟即塞瓶口。則
花易開而葉不損。若蜀葵秋葵芍藥萱花等類。宜燒枝挿。餘皆不

押入つと蒼あざ丸まる青あお小こ切きりく蔓つる葉はとも小こ水みづ十分じふぶつ小こ漬づけ至いた終はらるる迄まで
 たるた紙し活いけべしべし随ま分ぶん冷ひやきき水みづのの期き客きやくのの内うちににおおけけののありあり。旋ひら花はなのの
 活いけじじとと思おもひひああららままふふ。蔓つるともとも切きり水みづ穴あな蓋ふたうう大おほ桶づくへへ漬づけ至いた終はらるる迄までああをを
 吸すせせくくきき朝あしたのの蒼あざ丸まるをを活いけべしべし。甚いたよよううとと花はなをを活いけべしべし。紅べにをを活いけべしべし中ちゆうにに
 木き材ざいもも活いけべしべし。岡おか河か骨こつへへ葉はのの乾か。日ひのの出いぬぬ内うち切きりく。系けいだだととああをを
 吹ふきき活いけべしべし。油あぶらとと刻きくく辛から子こ瓜うりをを活いけべしべし。秋あき海うみ棠たうのの
 油あぶらのの節ふしをを槌つめめくくららとと志しをを活いけべしべし。系けいだだととああをを活いけべしべし。水みづとと養やう並なみてて活いけべしべし。
 随ま分ぶん活いけたたくくののああららままふふ。若わか知ち葉はのの期き子こ切きりく。水みづへへ本ほん通つうのの粉こなをを
 入い養やうてて活いけべしべし。秋あきののおおままのの性せいよよううととああをを活いけべしべし。瓶へい史しをを活いけべしべし。本ほん
 通つうととああをを活いけべしべし。系けいだだととああをを活いけべしべし。麻あしをを活いけべしべし。水みづとと養やう並なみてて活いけべしべし。以上いじやう水みづ養やうのの

ああららままふふ。○按あふふ。草くさ本ほんともとも小こ物ものとと。日ひのの出いぬぬ葉はをを
 切きりくくああららままふふ。付つけけののああららままふふ。挿さ花はなのの串くわいへへ瓶へい史しをを活いけべしべし。願ねがひひ
 妻さい一いち索さく考かうべしべし。竹たけるるららもも甚いたむむららううくく。或ある傳でんふふ培かみみああららままふふ。養やう並なみてて活いけべしべし。ババ
 ああららままふふ。そのの外ほかああららままふふ。家いへのの秘ひ傳でんありあり。

除しゆ蟲ちゆう法ぽう並なみ圖ず

種たね樹じゆ書しよ曰い種たね木き無な時とき戴たい毛もう與よ於お根ね下した皮かわ以もつ甘かん草そう末ま搗た之を亦また佳よし又また曰い。
 臘ろう月げつ二に十じゆ四し日にち種たね楊やう樹じゆ不な生せい喪さう又また曰い。斫せき松しょう樹じゆ五ご更げい初しよ斫せき倒たう便べん削せき去き。
 皮かわ則すなは無な白はく蠟ろう又また須す擇たく血ちゆう忌き日にち以もつ斧ふ敲か之を云い。今いま日にち血ちゆう忌き則すなは白はく蠟ろう自みづか出で。
 又また曰い元げん日にち天てん未み明めい將しょう火か把は於お園えん中ちゆう百ひやく樹じゆ土つち從したが頭かぶ用よう水みづ燎りやう過か可か免めん百ひやく。
 蟲ちゆう食じき葉は之を患わづら又また曰い園えん圃ぼ中ちゆう四し旁ぱう。種たね決けつ明めい草そう蛇だ不な敢かん入い。
常正按ふんフヤツと云ぬあり漢名望

乾の影枝へ卵をうと付く去る。二三日めよ二三分のいもむと
 る。青さめの葉色の力の悪さめあり。生長されば指の大
 じふあり。脊より星ありて眼のよ。○橘裏と云あり。橘柑橙柚
 菜黄椒乾の香あり。これを蝶飛来と卵と彩枝へ着る。○尺
 是ハ此大より蚕の如く。此と狭ハ黄赤色の角と出。其臭一。○尺
 蠖を諸木よせよ。よく見と指へ。○蛇虫小指とあり。梅桃李林檎
 るもの枝より卵を着る。形殺のよ。その内を捨て。け卵に
 月にかかりて虫とあり。木の又へ巢をうけ。教百あり。新葉紙
 喰ふ。飛あせよ。色みと汚あり。是と法ハ燈油と筆う布よ浸
 虫の巢と拭へ。又油をたて焼てよ。虫忽死と。○樹の根りと。

乾の影枝へ卵をうと付く去る。二三日めよ二三分のいもむと
 る。青さめの葉色の力の悪さめあり。生長されば指の大
 じふあり。脊より星ありて眼のよ。○橘裏と云あり。橘柑橙柚
 菜黄椒乾の香あり。これを蝶飛来と卵と彩枝へ着る。○尺
 是ハ此大より蚕の如く。此と狭ハ黄赤色の角と出。其臭一。○尺
 蠖を諸木よせよ。よく見と指へ。○蛇虫小指とあり。梅桃李林檎
 るもの枝より卵を着る。形殺のよ。その内を捨て。け卵に
 月にかかりて虫とあり。木の又へ巢をうけ。教百あり。新葉紙
 喰ふ。飛あせよ。色みと汚あり。是と法ハ燈油と筆う布よ浸
 虫の巢と拭へ。又油をたて焼てよ。虫忽死と。○樹の根りと。

或ハ割竹の内。又ハ板屏壁よ。日陰よ。蜘蛛の如く。長く産けらる
 卵あり。割るべ。控垂と死ハ春より。若くは毛虫とあり。けねよ毛
 多くありと。脊小金色の光あり。瓜半夏方帚といふ。枝或ハ樹の皮よ。居る
 あり。○又八九月に。桑櫻あり。乾の本又草の葉よ。色けらる。桑木
 樹裏あり。初ハ蜘蛛の巢の極よ。見ん。若くは冷風筋とのよ。そのたてや
 袋の如し。巢の小より。付枝と切捨て。控垂バ。よ。よ。虫は指かたに
 下。枯葉の下。或ハ中よ。寒と。春よ。草木の芽出を喰
 又桃梅林檎等の実を食。大に害とあり。○林檎梅紅等小一控の
 毛虫とせよ。二日月に。一葉巢より。腹よ。て一枝。蜘蛛の巢の如く
 たり。若くは。食。巢の小より。付枝と。若くは。枝を。て。

林檎梅紅等小一控の
 毛虫とせよ。二日月に。一葉巢より。腹よ。て一枝。蜘蛛の巢の如く
 たり。若くは。食。巢の小より。付枝と。若くは。枝を。て。



虫の圖



霖雨の節に建蘭の乾松葉蘭百金を瓦内へ入る。雨多くと
 降つて久遠に根のくさつ易からるへべ。○暑き日向常に焼くよ
 公月水気焼べ。日中よと土白く乾ば根へさう焼べ。日陰よとわ
 きのよと焼べ。又陰を好むおの暑中よの蘆箔を二重に履べ
 ○十月中旬ふ葉をさめく。南向ふかこむ。瓦挿入神柱を入る。
 日さる土際よとふさ下。水風を防べ。又盆栽よとさよよと
 乾へさき地を極へ焼くを多く集ま候へよ。齊民要術曰
 放火作温少得煙氣則免於霜種樹書曰棘能辟霜花果以棘圍
 中即茂○雪降葉よの枝細くとお易おの竹を添結まべ。さ
 さまはらとと繩よと巻まべ。松の枝又竹よとと雪よとおる

ものあり。節と振り落しとよ。○寒中よの肥ちを挿まよ。むさの
 比より害のよあべ。

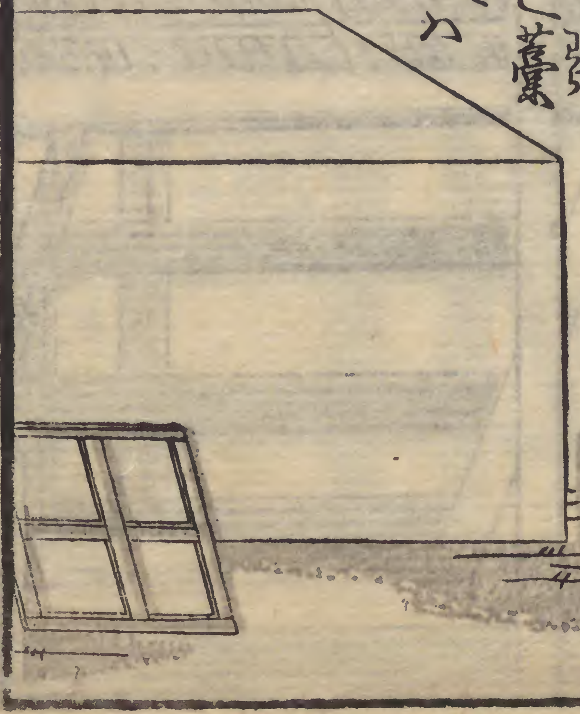
塘害ぬまどは事并圖

按ふ本邦の北國寒地よと。天竺安南等の暖國の草木を植
 む。冬のよも高き要あり。冬の皆庭ひろお入蓋べ。そ庭ひろの建柱
 水塞て南あたる地の於より。南ふはる朝日より夕日よとよの
 あつるよと建べ。形のよの如きを建と圖。この厚さよとよ。南の
 方清障子あり。九月迄よを寒風よと。扶桑花山丹花使君子の乾の
 あり。塘の内へ障子よとけ蓋まよ。十月月中旬より。嶺南琉球等
 の暖國より来る草木よと入るべ。その日法を好地へ入るよと

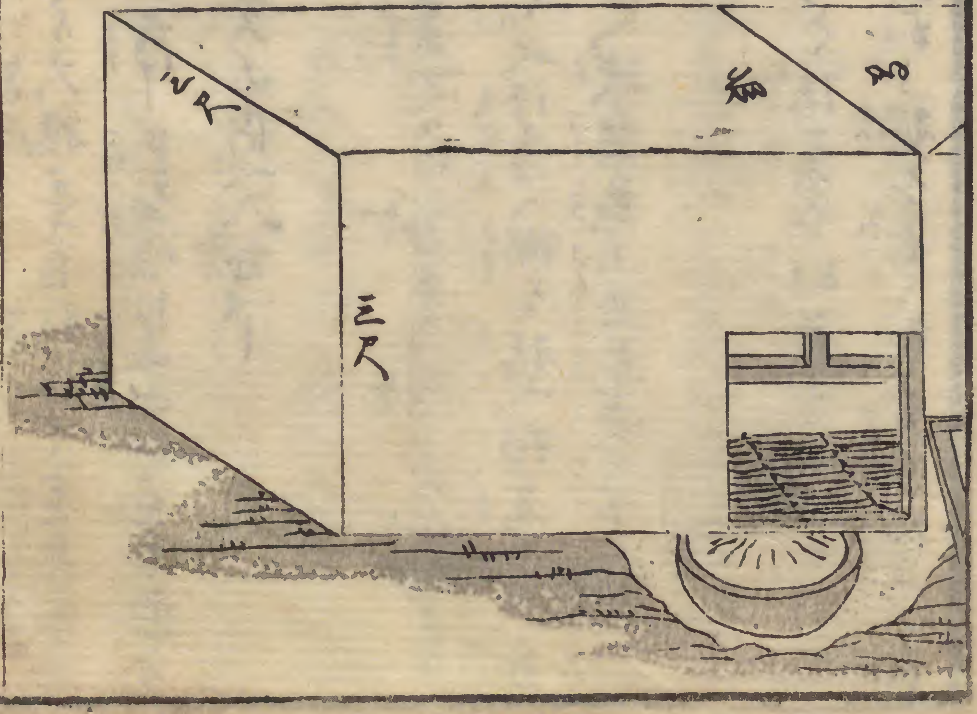
陰のあり。その内へ汁が流へ小冷と有て蓋を崩入るゆゑと云ふ。境の表相へ
茅のくも枝皮のくも葺べ。春の彼岸迄より丈夫なるものを先へ
出へ追々出さべ。庭物類へ透明の次へ出さべと云ふ。

方燈ひろの図

其造板へ南向より。茅のくもを葺
めくも。雨を透す。その下へ
地まぐ葺く。その下へ。その下へ
庵ひろの雨を透す。その下へ。その下へ
馬のどろ。後の葺めくも。その下へ
又障子ふく。その下へ。その下へ



合せ極末と入て。合せや同むる状
と云ふ。びひろ入る。その下へ。梅挑探海
紅蓮菴の敷。その下へ。その下へ
瓦と用せんと。その下へ。その下へ
内の子をえ。その下へ。その下へ
あけ蓋へ。外よりひろのくもを
て。掘く。火を。炭火を。埋
消ぬ。その下へ。その下へ
至も。火を。その下へ。その下へ
火の。その下へ。その下へ



上へ湿むろをまべ。ひしうへへ大抵二十日程少く晝花用の
なる。然ども挿の白咲紅梅の色蒔一匙を暖日小出で日小あてる
時の色を出すあり。又夕方よりむろの内へ入蓋べ

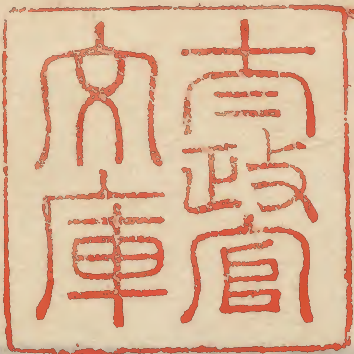
害仕事

あまぐらふ南向ふ入口は明障子さうけ蓋あり。深く五尺下より
一丈さうけ挿の梅。少秋年みと。又口方へ棚を挿挿木を入蓋
る。然ども害の湿気まきさけ。披葉花山丹花使君子霸王樹
の類の陽氣を好く甚寒ふらむむあへ入蓋る。必腐挿る
ものあり。さうけ蓋を思はさうけ陰を好敷を入蓋べ。○又
さうけむろとさあつ。是のさうけ挿をさくあり。たふ挿木とさ

候と此中を通りさうけさうけ。さうけ挿の梅よ木紙挿。葉紙
あささうけ。さうけさうけさうけ。さうけ厚紙あり。あささうけさうけ
さうけ。夜はむろさうけ蓋べ。是より入るおの。萬年青石菖さうけ
又あささうけ。さうけを入さうけ

土藏の事

塗垂色同。東西へ長く建替壁はして。入口も窓も皆南向は明
さうけ障子さうけ。夜は戸をさうけ。是より入る草木の格別さうけも
さうけ。百両金珠破根蘭の類。さうけ。斑入梅さうけ。葉紙を入べ。又さうけ
土地さうけ。さうけの縁の下に掘蓋ありて。又挿木を入べ。上の家根の
葉紙。又さうけさうけ



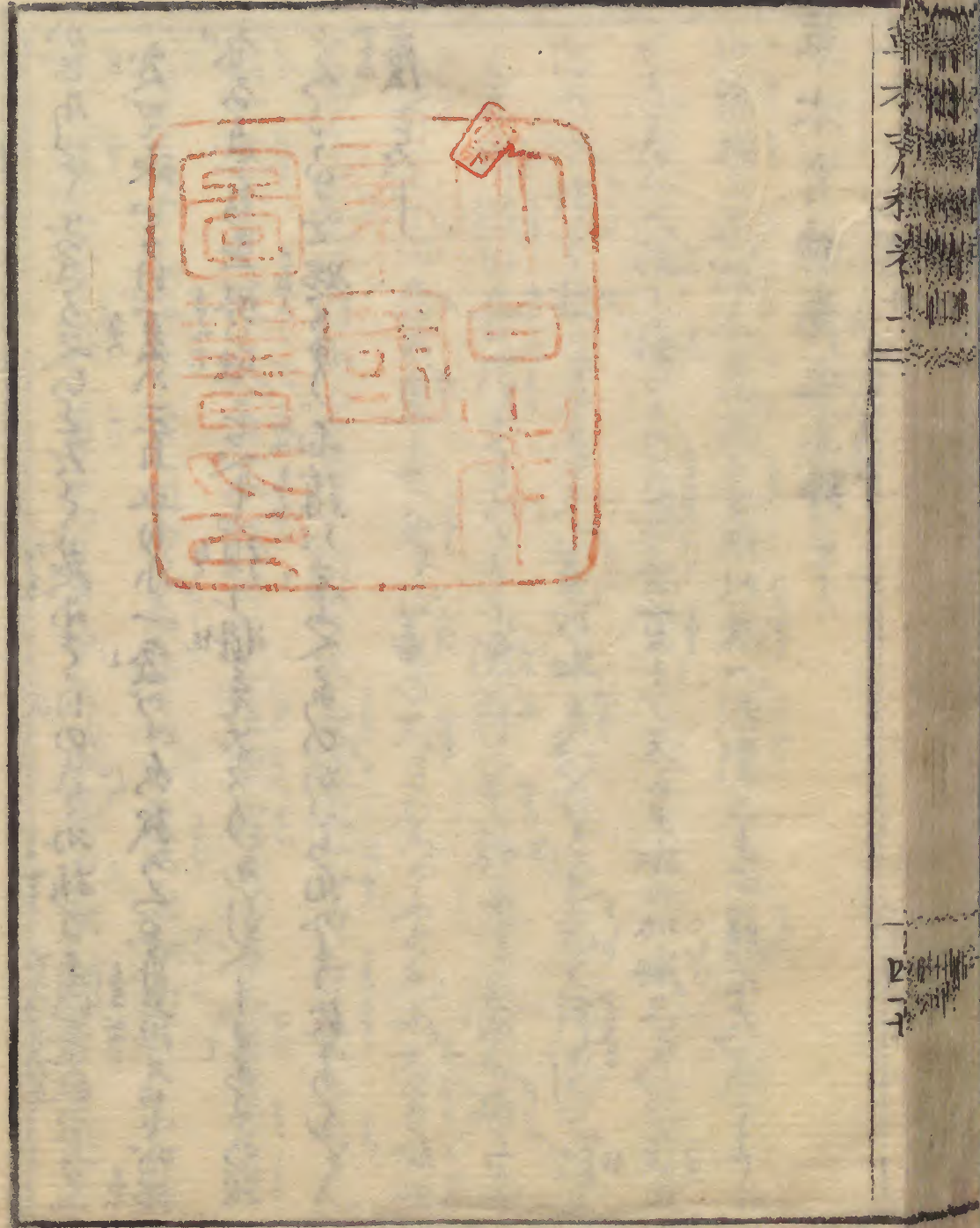
種樹運送の事

地帯抄云。種木若お幸國持板の海陸ともお籠入らう。せまぐん又桶は種くうらふ巨懸重してまぐも水の加減をれど。葉の内お水滞り根くさるゆへ。籠の水多かけをきて清ぼて根よよき。乾温を合湯がごとく。陸行はき乾ふ。葉も枯らさぬ。早し。二三日の重しを。籠の大きからうまき。大味柑籠より。籠の内おいとど。むろ気。種木一本。お葉をゆき。枝と巻よせ。根入多本数を入る。乾気よて。ちも。ゆへ。入らう。水苔ゆつめる。恙あつた。葉を和み。ゆへ。板は揉て入る。ゆへ。苔よからう。籠の上。刻竹よて。う

かどあつ。ぶぶらう。いとど。葉あつ。目のこ。板よ。葉。秋の。一。水。夏。三。日。一。交。ゆ。気。あ。を。味。但。根。え。り。け。一。雨。降。は。あ。の。か。ら。ゆ。に。あ。く。度。一

草木育種卷之上終

Handwritten text on the right edge of the right page, possibly a title or reference.



Handwritten text on the right edge of the right page, below the main frame.

